

# PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

## 暗黒時代から新たな道徳性へ

タイム誌の「今年の人」の欄で、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が載っていました。そのカバーストーリーで法王は、この世が進歩的だと思われている事に対してはつきりと反対の立場をとっていました。その「進歩的」という考えのひとつは、人間が誰が生まれ、誰が生まれないかを決める権利を神と共有しているという事です。

「進歩的」という言葉に注意してみてください。それは、かつては希望と樂觀という響きを持った言葉でした。それが今では微妙に病んだ響きを伴うようになっていています。現代人は、誰が生まれるかだけでなく、誰が死ぬかということまで決定する権利をずっと昔から求めてきました。

それは、C・S・ルイスが言っているように、人間が自然を支配する力が増加するにつれて、ある者が他の者を支配する力も増えるという事なのです。人間は空を飛ぶ能力を手に入れた、高性能の爆薬を作る能力を手に入れました。それらが戦争に用いられ、ごく少数の人間が他の何万人も殺せるようになりました。その意味では、核兵器は「進歩的」だと言えます。かつて戦争が非能率的で、人をひとりずつ殺さなければならぬ時代がありました。

核爆弾を爆発させることと比較すれば、中絶は非常に小さい悪に見えるかもしれませんが、今苦しんでいて、もうこれ以上生きたいと望まない人を苦痛なしに殺す事は、思いやりある行為に見える

かもしれません。私達は殺人のスケールの大きさも方法の巧みさも達成したのです。これこそ、ある意味では進歩です。そして、これら全ての殺人の形態に反対する人は「反動主義者」と呼ばれ、まだ「暗黒時代」にいると言われています。

「暗黒時代」というのは神話です。ローマ帝国の滅亡から、キリスト教が支配したヨーロッパの出現までの長い時期は、人類の歴史の上まれにみる道徳性の発展の著しい時期でした。古代ギリシャ・ローマ時代では、間引きや、中絶、奴隷制度、自殺、はりつけなどの行為は日常茶飯事でした。ローマ時代の大衆娯楽には、コロシウムで剣闘士達が殺しあい、猛獣がなすすべもない人達を引き裂くさまを観る事も含まれていたのです。キリスト教が優位に立つにつれて、これらのことは全て法律

によって廃止されました。いわゆる「暗黒時代」の終わりまでに、それらはキリスト教世界のいたるところで禁止され、不法に行なわれた場合を除けば、存在しなくなりました。最近まで私たちは、存在しないことを全くあたりまえの事と思い、暗黒時代に私達が大きな借りがあることを忘れてしまったのです。そして「暗黒時代」というまさにその名前こそが現代の私達の忘恩を物語っているのです。

現代社会はキリストの道徳性からのくらいかけ離れているかという点で「進歩」を定義するようになさなりました。キリスト教が中絶や同性愛や自殺が悪だと非難していましたが、「進歩」して、そのような行為が認められれば、人間の「権利」と言われることになります。間引きや男色さえも法的な地位の要求を主張している

人達がいるために再び行なわれつつあります。一方、現代の戦争はそれまでの時代に許容されたものをはるかに超えたばかりでなく、それまでの時代には想像できなかったようなものになってしまいました。

現代社会は、必然的に、新しい道徳性としてキリスト教の道徳性に反する行動を成文化しようとしてきました。その道徳性とは、神を敬う気持ちがないので、善悪の究極の尺度は個人の楽しみや主観的な幸福なのです。その結果は同じく必然的にわがままな人達の社会になります。もっと正確に言えば、その社会は父親が我が子に対する責任を放棄する社会なのです。子ども達は中絶されるか、好き勝手に成長するままにされるかのどちらかになるのです。

「新しい道徳性」は、完全な失敗であったと気づき始めています。この「新しい道徳性」は、彼らに責任を負わずのは難しいけれども、何らかの方法でコントロールする必要があるので、残虐な世代を生み出したのです。社会を管理する最も確実な方法、つまり自尊心が、父親の怠慢によって否定されてきたのです。しかし自由主義者にできる唯一の解決策は、彼らに避妊についての知識を教える事だけなのです。それも幼い頃から全くしつづけていないような若者達が九ヶ月先まで考える事ができるといふ前提に立つての事ですが。

人間が生き続ける義務を守る必要はありません。まして中絶を責めることもできません。セックスの自由を非難することは特にできません。なぜなら、この「新しい道徳性」は、それが人間にとつて手に入られる最高の幸せであるとみなしているからです。

進歩主義者たちは美德に代わるものを見つけていないのです。彼らにできることは、避妊や中絶や安楽死といった間に合わせの事を提供するだけです。「暗黒時代」は美德を理解し、文明を築きました。進歩的な時代は美德を理解しなくなり、受け継いできた文明を壊しています。安楽死はまさにその象徴です。それは、神の国を求め、それができず、苦痛のない消滅だけしか望めないこの「新しい道徳性」の社会の最後の秘跡なのです。

Celebrate Life 3-4/95

## 老いた肉親の世話

マレーネ・パグナル

「私たちが不忠実であつても、神は常に忠実である。」  
「わからない、どういふこと...」。

ティモテオへの第二の手紙

2章13節

電話のベルが鳴つたとたんに目が覚めた、上ずつた母の声、

母を家からアパートに移させた、私の決断は正しかっただろうか？行き届いた世話ができていたか？母がアパートの周りをうろついていたと聞かされると、ドキッとした。母にもしものことがあつたら？

「困つてるの。バスを待つてるのに、電話をかけたも誰も出ないし、どうしたらいいの、」

「お母さん、心配しないでベットに戻つて、まだ朝の四時よ、老人センターに行くバスが来るのは五時間後」私は答えた。

「でも時計はもう九時五十七分になつてる。行かないか、いけないのには誰も来てくれない。」

「九時五十七分じゃなくて三時五十七分。窓の外を見てごらんさい。まだ暗いでしょ。寝なくちゃ」

病院で診てもらつても、医師の返事は決して明るくない。「深刻で回復の見込みがない脳機能の不良」で、よくなるどころか、悪化する一歩手前とのことだった。

医師は個別介護施設に入れるよう勧めてくれ、

六ヶ所見学に行った。とても早いし母にとっても最良と思われたが、何かひっかかるものがあつた。

母との同居は無理だ。部屋が足りないし、学校に通う二人の子どもともうまくいかないだろう。代わりにアパートという手段をとつたにすぎない。

友人や老人医療カウンセラーに相談すると、試しにやってみたらどうかと応援してくれた。神も祝福して下さっているのか、結婚した娘の家の隣にアパートを借りることができた。母は新居に大喜びで、使い慣れた家具に触れながら歩き回つた。ガラス食器の入った箱を開けるようにと手渡すと、1個1個慎重に取り出しては食器棚にしまった。

最初の数日間はやかった。娘がしょっちゅうのぞきに行つて、食事や薬を忘れてないか確かめた。毎朝、老人センターへのバス

も心待ちにしている。私達は母の適応ぶりに大喜びした。

そんなに簡単にいくものではないと早くに気づくべきだつた。いや、うまくいくと信じたかつたのだ。昼夜おかまひなしにかかつてくる電話は予期せぬ事態だつた。錯乱し困惑する母、私達がすべてを投げだして注意を傾けていないと、大変なことになる。

三年もの間、アパートと家を飛び回つては必要な世話や監視を続けた。そしてついに、24時間目が離せなくなつてしまった。家の隣に離れを建て、クリスマスの一週間前に母を連れて来た。かつては反対した同居だったが、ツリーに飾りつけする母を見ながら、これでよかつたと思つた。

大家族で楽しく暮らすうという願いは、もろくも打ち砕かれた。ひとりで洋服も着られない母、毎日、

子ども達とぶつかつてしまふ。特にひどいのが食事時で、母は料理や子ども達の事でやかましく言つ。私がかうまく仲裁できればいいのだが。寝る時はさらに大変で、夜中に何度も下に降り、母をなだめてベッドに連れ戻す。

母の錯乱は進み、扱いに苦勞するようになった。友人達に家族への負担が大きすぎると言われても、聞き入れなかつた。だが一年半後、ついに「潮時です」と医師から宣告される。

「自宅で介護したいお気持ちにはわかりますが、そろそろ手に負えなくなつてきました。ご家族のためにもお母さんのためにも、介護施設に入れてはどうでしょう。」

荷物をつめ、母を車に乗せると、私と離れると気づいたのが目の動きから読み取れた。施設への訪問は実につらい。なぜ私と一緒に帰ることができないのか、母にはわからない。三ヶ月もしないうちに体がだんだん悪くなり、昏睡状態となつた。ある日の午後、面会時間より前に病院へ行き、母が目覚ましてからすぐ亡くなるのを見守つた。

神や夫の手助けなしには、五年間も介護を続けられなかつたと思つ。この経験を通して神は、老いた肉親を世話する人達の助けとなる原則を教えてくれた。

1 「隠れた幸福」を見つけた。役割が逆転するのは大変だ。私知つていながら、母が恋しくなるかつての母が恋しくならぬ。強く愛するほど、声をあげて怒らずにいられない。隠れた幸せはすぐ目の前にあつた。かつて母が私の世話をしてくれ

たように、今度は私が母を世話をする。手をひいて道をわたり、フリルのついたブラウスを着せ、夜は毛布にくるんで寝かせる。

2 愛する者の願いや要求にこたえようと自分を消耗させない。母のためにどれだけ尽くしても、どれだけ時間を費やしても、充分という答えがない。境界線を引いて冷静に対処しよう。自分自身や家族のための時間をつくる必要がある。

3 自分のことばかり考えない。母は時々、私の手助けを拒絶することがあつた。「自分一人でする」と怒つて言つ。私も一瞬いやな気分になるが、母の立場になつて考えてあげようと努める。すると、母が不満を感じ齎しているのに気づく。錯乱している母の前に、あえて敵になることもしばしば。特に、母のいやがる決定をくだす時などがそうだ。少女の頃、私がそうだったように、母もご機嫌なめになることがある。ある時は放っておき、ある時はやさしく慰めよと、神が教えて

くれた。

4 第三者に助言を求め。家族が結束するべき時、残念ながら現状は正反對のことが多い。肉親の介護をしていない兄弟姉妹ほど、私達の行動に批判的で、失敗（と彼らは決めつける）に口出ししたがる。大切なのは、もつと客観的に見れる人の意見を聞くことだ。医師、カウンセラーや派遣看護婦なら、肉親の希望に理解を示してくれるだろう。牧師や僧侶、親しい友人たちなら、私たち家族に何が必要か、そして見落としがちな配偶者や子ども達の気持ちもわかってくれるだろう。他者の手助けが、自分一人じゃないんだという励みになる。地域の支援団体に入ったり、神に助けを乞う方法もある。

てどうにかやってきた。しかし私はスーパーマンでもなければプロの看護婦でもない。結果的に、母は介護施設の方が幸せだという事実を認めるしかなかった。だからといって私が失敗したのではないし、もう介護の役目が終わってたわけでもない。母も一層私を必要とするようになった。私が来たのを覚えてなくても、私の顔を忘れても、母を見守り続けた。私が見守ることはできない。母を見守ることはできる。母のために祈ってもやれる。最後の数ヶ月は、看護婦や援助者の手を借りて神がお世話して下さいました。

ない、など。心の緊張は確かに精神、記憶に影響を及ぼすけれど、「すべての心配を神にゆだねれば、神はあなたたちをかえりみたまう」【ペテロの第一の手紙五章七節】この言葉をある友人が思い出させてくれた。

7 「今あるものは信仰と希望と愛との三つである」【コリント人への第一の手紙十三章十三節】「私たちが不忠実であっても、神は常に忠実である。」【ティモテオへの第二の手紙一章十三節】神は私に「永遠のいのちの望み」を与えて下さり、そのおかげで母に別れが言えたのだ。詩編の作者のように「足がゆらく」と何度も言いたくなったが、今振り返ってみれば「主よ、あなたの愛が私を支え、」【詩篇九十四編十八節】との思いだけ。きつとあなたにも同じようにして下さるだろう。

## 向上心 対

### 日本の

### 出生率減少

日本の国際化に向けての向上心は上がる一方で、高齢化社会と人口の減少が将来に及ぼす影響について、政治家達は心配しています。国連の格付けによると、日本は高齢化社会です。出生率と死亡率の急な減少によって、他の国々よりずっと速く高齢者の人口が増えているという事実から、この心配は実体化されているのです。日本大学の経済学の岡崎教授は、こう説明しています。日本の高齢者人口の増加は、たった二十六年間で、全体の7%から14%に増えています。ところがそれと同じだけ増えるのに、フランスでは百十五年、スエーデンでは八十五年、そしてイギリスとドイツで

は四十五年かかっているのです。

出生率の減少は現在、社会制度の変化により、一夫婦につきマイナスイメージです。元ジャーナリストで、今は日本外国人報道センターの研究と調査のディレクターである佐藤さんは言います、「もしこの率のまま続いたら、現在一億二千五百万人の人口が、七十年で半分に減ります。千年後には、地球に日本人は一人も居なくなるでしょう！」

「ザ ファイナンシャル  
エクスプレス紙  
1994年7月8日」



今月のプロ・ライフヒーローは東京の住谷由美子さん。

彼女は最初、場合によっては中絶を認める立場をとっていて、全くの中絶反対者ではなかったけれど、手に取った「赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅」で心が変わり、社会が多胎妊娠の減数手術を行っていることを知ったある日、作家としてのペンの力でこの事実を社会に訴えたいとプロ・ライフの事務所に電話をくれました。

事務所では、彼女の申し出を心から喜び、彼女は夏の暑さにも負けず、方々に取材に行ってくれました。そして出来上がったのはプロ・ライフ・ニュースの64号の1ページを飾った記事です。

今、彼女は昼間はドラッ

グ・ストアーで働きながら、その制服の襟元には国際プロライフのシンボルピン、10週目のおなかの赤ちゃんの足が輝いている。「お客様に人気があり、何のピン?とよく聞かれるのよ」と事務所への電話で話してくれました。

彼女はこれからももっともっとたくさんの記事を送ってくれるだろうと事務所では期待しています。

大岡滋子

## オランダの安楽死制度から学ぶ

マイケル・フメント

米国では、こと安楽死

(「医師の介助による自殺」という呼び方の方がよく知られている)に関して

は、いわゆる「危険な坂道」を滑り落ちていくのではないかと倫理学者が危惧

しています。その危惧は、安楽死が認められている

オランダで既に現実となつていきます。そしてそこ

には、私達に対する警告が多く含まれているのです。

「危険な坂道」の議論とは、例えば、現在、比較的

無害なものを認可すれば、それがやがて現時点では

考えられないような世の中の風潮を生み出すので

はないか、というものです。

現にオランダでも、ほんの少し前までは医師の介

助による自殺は全くの違

法行為だったのです。

それが変化したのは、一

九七三年、ある医師が末期患者である母親をモルヒ

ネで死亡させるといふ事件を起こし、裁判が行われ

たことからでした。裁判所はこの医師に対し有罪の

判決を出しましたが、執行猶予付のたった一週間の

実刑と1年間の保護監察処分処分に処しただけでした。

これ以降、裁判所は徐々に法律を崩していくようになり

ます。まもなく裁判所は、有罪判決を下さないようにな

り、どんな患者を死亡させ、それをだれに相談すべきか、一定のガイドライン

に沿っていけば、どんな医師でも無罪放免するよう

になつていきます。裁判の中で必ずしも明文化され

ていたわけではありません

が、当初は患者が末期の病に冒されていることが

一定の基準と考えられていました。しかし、これも

やがてうやむやになつていきます。

一九八五年には、ピーター・アドミラル博士(退職後は麻酔医)が、多発性

硬化症で長期にわたり生命を維持すると考えられる少女を死亡させた疑いで裁判にかけられました。

しかしこの行為も、病気によつてもたらされる障害

が、致命的ではないにせよ治療不可能だとする高等

裁判所が定めた基準に見合っているとの判断により、告訴が取り下げられた

のでした。

また最近のケースとして、身体的には健康だが重

て、身体的には健康だが重

て、身体的には健康だが重

度の抑うつ症の女性が、医師に要請して安楽死を選んでいきます。

このように末期患者に限るといふ基準が崩れると同時に、患者による安楽死の明白な要求というも一つ一つの基準もまた崩れようとしています。

医師たちは次に、致命的ではないが障害をもたらずダウン症候群や脊椎破裂などの幼児を死なせるようになりました。

また、永続的に植物状態の患者(誤って「昏睡状態」と呼ばれることが多い)も安楽死の対象とされました。そのような患者数人を、アムステルダムのある看護婦が何の同意書もなく死亡させた事件で、その違法の殺人行為に対してではなく、医師の指示なしに行動したことに對してのみ有罪とされたのです。

アドミラル博士は私に、「新生児の安楽死を願ひ、

昏睡状態の患者の死を認めることは、社会にとつてきわめて正常なことだと私は思います。」とぶつきらぼうに言いました。

一九九十年までに、オランダの死亡者の9%である一万一千八百人が医師によって死亡させられました。恐ろしいことに、このうちのおよそ半数が、「患者の意思によらない安楽死」か、もしくは「患者の同意なしに、生命を絶つ目的でモルヒネを過剰投与した」ケースとなつていきます。

裁判所がどれだけ基準をゆるく設定したとしても、事件が起こればそれさらにゆるめるのです。実際、これまでに実刑を受けた医師はたった一人で、しかもその有罪判決は後にくつがえされました。

世論調査では、オランダ人が常に進歩的な安楽死法に賛同していることがわかりますが、それも個々

の事情によるようです。年配の人々を対象にしたあの調査では、自立して生活している人の半数が安楽死に賛成しているのに対し、療養所にいる人のほとんどが反対しました。施設に収容されている人の半数以上は、自分が許可なしに殺されるのではないかと恐れていると答えたのです。

ある重度障害者のグループは、政府に宛てた手紙の中でこう述べています。「私達は生命を脅かされていきます。自分達が社会にとつてお荷物であることを知っているからです。多くの人が私達を役立つだと思つていて、どうやって私達は自分から死を望むように仕向けられていくのでしょうか。もし新しい法で安楽死が認可されたら、それは私達にとって大変危険で恐ろしい事になります。」今年、ついに国会はこの医療法

案を可決し、裁判所でこれまで述べられてきたことが成文化されました。

皮肉なことに、これらはすべてドイツ占領下で病人や身体不自由者を安楽死させるといふ占領軍の要求に、医師らが生命を賭けて抵抗した国で起こつたのです。

安楽死に反対するアムステルダムの元皮膚科医アイザック・ヴァン・デーグ・スルイスは、なぜ自国がこの気味の悪い制度を率先して取り入れるに至つたか、正確には知らない事実を隠そうとはしません。

しかし、「わが国の国民は、アメリカと同様、理想主義者なのです」と彼は言います。「だから政府と医師がしているのは正しいと信じていたのです。しかし、そのオランダの安楽死制度の将来に關しては、強力な支持者ですら不安を抱いているよ

うです。あるアメリカの新聞に對してアドミラル博士は、高齢化社会になるにつれて、何万人もの痴呆老人が出てくるでしょう。これは恐ろしいことになるかも知れません。そのうち、純粋に経済的な理由から、例えば、完全に痴呆となつてから三年経つたら死亡させてもよい、というようなことが受け入れられるようになるのではないかと思うからです。これはそれほど想像に難くないことです。あなた方なら止めることができるでしょうか。我々には避けられないことのように思えます。」

いずれにしても、自分達の国では起こらないなどと言わないで下さい。かのオランダでもかつて人々はそう言っていたのですから。

## 仲間意識でプラス方向へ

「仲間意識」…何と聞き

あきた、過大評価された、誇大表現された、そして誤解された言いまわしなんでしょうか！なぜこんな事を言うかって？それは、これが近年の十代の青年のほとんどの問題に対するお決まりの答えになっているからです。「十代の妊娠率はなぜ高いのか：仲間意識のせいだ！」「近頃の十代の多くが飲酒をしているのはなぜか？…仲間意識が悪いのだ！」

確かに間違っではない。仲間意識というものは、若者の生活において、強力な影響力を持つものである。しかし、それがいつもマイナス方向に働くとは限らないし、唯一の原因では決していない。それ故、仲間意識が彼らの問題すべてに対する答えでは

ないのです。「仲間意識」と

いう言葉はあまりにも頻繁に使われていますが、そろそろ他の答えを見つけて出す時ではないでしょうか。そうする事が解決につながると思つのです。マイナス方向の仲間意識に加えてアルコールの入手のしやすさ、セックスに関するコマーシャルズ、ごまかしと鈍感さの促進とあからさまな嘘とが混じり合った救いようのなさと合いました結果より多くの若者が今日、アルコールとセックスにおぼれているのです！

自分自身に正直になるうではありませんか！大人の中には、こんな事を言う人達がいいます。「気をつけてさえいけば、セックスをすること自体は悪い事じゃない。」この「気をつ

ける」というのは、成功するか失敗するか分らない避妊対策のことです。この言動に惑わされ、騙されて、十代の少女が妊娠するケースの方がどれだけ多いことか。真実はどうして変わってしまったのでしょうか。十代の青年が本当に聞かなければいけないのは、性行為は結婚生活に付随するものであって、あくまでも結婚生活の中でのみ起こり得る行為であり、それが神のお望みなのだ、神は我々の幸せを願ってそう望んでいらっしやるのだ、と言う事なのです。

私達は、アルコールにノーと言うこと、セックスは結婚するまでとっておくことを十代の若者に教えないといけない。そして仲間意識をプラスに働かせるよう彼らを助けべきです。最近の若者は昔より知能も高くなって、有害な罪深い出来事から

抜け出すようお互いを説得できると思つのです。酒盛りになると分かつていくパーティーにどうして行くことがあるでしょう。

マイナスの仲間意識によつて、十代の若者はパーティーに行くことがあるかも知れません。しかし逆に、プラスの仲間意識によつて、お互いにパーティーに行かないよう説得できるのではないのでしょうか。「私、なんか行きたくないな。何か他の事しない？」「どうせ何か困った事が起きるに違いないわ。関わらない方が身のためよ」「こんなふうな単純な言葉でいいのです。長く道徳臭いお説教を友達にする必要はないのです。そして私達大人は、彼らがこうなってくれるように導いて行かねばなりません。

最後にある人を例にして締めくりたいと思います。その人はマイナスの

仲間意識の象徴ともいえる人で、そうあることで巨額の富を築いています。歌手のマドンナは世界的レベルの大成功をおさめた富みも名もある若き女性です。しかし、神のレベルから見れば、何と貧しいのでしょうか！彼女はセックスという美しい贈り物を利用して、それを汚らわしいものに変えてしまいました。そうしながら、他の人々にもセックスをそういう風にとらえるような風潮を作りだしました。神は素晴らしい才能を彼女にお与えになったのに、彼女は取り違えてしまいました。私達は生まれながらに才能や能力を与えられており、それを正しく使うにせよ、誤って使うにせよ、神にその使い道を説明できなければいけません。

今日の十代の若者の生活で、仲間意識をプラス方向に働かせるよう挑戦しようではありませんか。逆

に彼らが大人にもつと高い道徳の場で挑戦してくるよう促してくるようによいでしょう。我々は十代の若者に対して、アルコールとセックスは束の間の快楽を与えてくれるかも知れないが、一生の悲しみももたらすかも知れないことを正直に語って聞かせねばなりません。「正しい行い」は、決して彼らの健康を損ねることではないし、観念を鈍らせることも刑務所に閉じこめることもありません。むしろ、神の思し召しそのままに、健康で幸せで善良な人間になる自由を与えてくれ、永遠に続く愛を経験することが出来るでしょう。

モリー・ケリー

## 『妊娠中絶への性向が私達の規範に及ぼす危険な影響』

私達ひとりひとりがパズルの大切な一片なのです。

もしあなたが今までにケーキやパイを焼いたことがあるなら、一つの材料でも忘れたら出来上がりの結果が変わることは知っているでしょう。調味料は料理を仕上げるためになくてはならないものです。

私達の世界もこれに似たものです。人々は、独特の人格や才能が混じり合い、それぞれ社会や世界へのある程度の影響とも混じり合っています。

明らかに、何の歯止めもない中絶の使用はこの平衡を崩し、未来の世代の平衡を崩しています。以下の話は、考えさせられるものです。

約二百年程前、結核を患う一人の女性がいました。彼女は5番目の子供に期

待していました。最初の子供は目が見えず、2番目の子供は死んでしまいました。3番目の子供は耳と口が不自由で、4番目の子供もまた結核に冒されてい

ました。夢も希望もない状況にもかかわらず、彼女は5番目の子供、息子を生み、ルートヴィヒ・バン・ベートルベンと名付けました。ベートーベンのいない

人類の進化は、それほど違わなかったかも知れませんが、音楽の世界での物足りなさは大きかったでしょう。

他に誰が人生の最初の一まわりのうちののけ者にされているのか・・・と言うのは当然の問です。中絶の流行のために、私達の人生においてどんな局面

が奪い取られるのでしょうか。私達の世界は、私達が生まれないことの存在的そして集団的な影響をどのように受け、中絶によってどのように制限されるのでしょうか。

私達は、友達や隣人や伴侶を失っていませんか。建築家、農夫、医者、小説家、教師、科学者達を失っていませんか。そして、私達は決して知ることがないだろう、そういった人々の社会への貢献についてはどうでしょうか。病気の治療、世界の飢餓への解決策、新しい発明……。大切なことは、私達が知らず知らずに、人類の自然な成りゆきに余計な手出しをし

続けていることです。良識のある人々は、全ての生命には価値があり、人

間ひとりひとりが世界に貢献しているということを知っています。笑顔、音楽、政治……人間が生み出す靈感またはまさに愛を通して、生命のひとつひとつは人類全体にかかわっています。私達ひとりひとりがパズルの大切な一片なのです。

ノボトニ